

ワーズワスと芭蕉

岩崎豊太郎

I. 序論—希望と絶望

1789年7月14日にフランス革命が勃発した時、多くのイギリスの人々はミレニアムの到来を期待した。19歳のケンブリッジの学生であったWilliam Wordsworth (1770-1850) もその一人であった。彼は、学友のRobert Jonesとともに、翌年の1790年に大陸徒歩旅行に出かけたが、フランスのカレーに7月13日の夕刻に上陸した際に、カレーの市民が革命一周年記念祭の前夜祭を迎えて歓喜に沸き立っている様子を目の当たりにして、衝撃的に感動したのであった。

時はまさに激動の時代であった。1793年2月1日にフランスはイギリスに宣戦布告して、イギリスはフランスと開戦した。フランスでは、6月にジャコバン党による独裁政治が始まった。その後ナポレオンが台頭して、ついには多くのイギリスの青年たちはミレニアムへの期待を裏切られて失望することになった。

Wordsworthは、当時のイギリスとフランスの情勢、フランスに残してきたAnnette Vallonと愛児Anne Carolineに会えなかったこと、またWilliam Godwinが1793年に出版した*Enquiry Concerning Political Justice* (『政治的正義』) によって極端な合理主義の思想に被れたことなどが重なって、1796年には深刻な精神的危機に陥っている。それでも彼の精神的な暗黒の期間はあまり長くは続かなかった。彼は精神的危機を克服すると、1798

年に S.T. Coleridge と共著で、イギリス・ロマン主義を宣言する詩集 *Lyrical Ballads* (『抒情歌謡集』) を出版した。

Wordsworth が 1790 年にフランスで見た、ミレイニアムの到来を期待して歓喜していた人々の姿は、人間の精神の尊厳を実証する心象として記憶され、彼の〈詩の世界〉における原点的心象となったと考えたい。William Blake が 1794 年から 1796 年にかけての頃に、彩色版画 *Glad Day* 《喜びの日》に描いた青年像はこの心象についての暗示を与えてくれよう。

ところで、フランス革命勃発よりも約 180 年前の日本では、1615 年に豊臣家が大阪夏の陣の戦いで敗れて、滅亡した。民衆は、戦乱が終焉して平和が訪れると、幸福な社会の到来を夢見たが、徳川家の幕藩体制が確立されていくにつれて、現実の社会に幻滅することになった。

松尾芭蕉 (1644-1694) はこのような時代に生まれた。彼は Wordsworth と同じように 13 歳の時に父親を失った。芭蕉は藤堂新七郎家の嗣子良忠(俳号は蟬吟)に仕えた。良忠は、北村季吟を師として寛文 5 年 (1665) に貞徳翁 13 回忌追善百韻俳諧を主催した、俳諧の熱心な愛好家であった。

芭蕉は良忠の寵愛を受けたが、良忠は寛文 6 年に 25 歳の若さで逝去した。23 歳の芭蕉は、主君の夭折を深く悼むと同時に、自らの将来に絶望したことと思われる。良忠の死後、芭蕉が伊賀上野を離れて江戸に出るまでに送った生活については明らかではない。しかし、「生活の場を京都の禅林などと想定するのがもっとも自然ではなからうか」(『芭蕉おくのほそ道』270 頁) とする説に従いたい。芭蕉は、「しばらく身を立てむ事をねがへども」、「かれ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごとゝなす」(『笈の小文』、『芭蕉紀行文集』69 頁) と記しているように、「造化にしたがいて四時を友とす」(『笈の小文』) という、日常の体制の外に身を置いて、俳諧師として、自然を逍遙する道を選んだのである。芭蕉が良忠と過ごした日々は彼の生涯にわたって幸福な人生の典型として記憶されたと考えたい。

Wordsworth と芭蕉は、ともに多感な青年期に希望に満ちた日々を送ったが、その後深刻な絶望を体験していること、そして詩人として、俳人と

しての生涯を送った時にそれらの栄光の日々が彼らの想像力 (Imagination) の指標となったことを前提として本稿を論じたい。

II. 本論

本稿では、Wordsworth の代表作, “Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood” (*Poetical Works*, iv, 279 - 85) をとくに参照して、Wordsworth と芭蕉の詩の比較・考察をすすめるが、まず本詩について一考したい。なお訳詩は、豊田實博士の「幼年時代の追憶より受くる霊魂不滅の暗示」(『ワーズワス詩抄』) に依った。

“Immortality Ode” は、幼年時代の〈栄光の世界〉の描写で始まる。

There was a time when meadow, grove, and stream,
The earth, and every common sight,
To me did seem
Apparelled in celestial light,
The glory and the freshness of a dream.

(“Immortality Ode”, 1 - 5)

曾ては牧場も森も水の流れも
大地も、あらゆるありふれし景色も
われに取りては
天上の光に装はれて、
かがやき鮮かなる夢とし見えぬ。

“Immortality Ode” は、〈栄光の世界〉の喪失に対する嘆きに転じる。

Whither is fled the visionary gleam?
Where is it now, the glory and the dream?

(“Immortality Ode”, 56-57)

幻のひかりの行くへいづこそや、
かがやきし夢、今いづこにありや、

最終連は、幼年期における〈栄光の世界〉の代わりに〈想像力の世界〉
が得られたことをうたっている。

The Clouds that gather round the setting sun
Do take a sober colouring from an eye
That hath kept watch o'er man's mortality;
Another race hath been, and other palms are won.
Thanks to the human heart by which we live,
Thanks to its tenderness, its joys, and fears,
To me the meanest flower that blows can give
Thoughts that do often lie too deep for tears.

(“Immortality Ode”, 197-204)

沈みゆく日をめぐりて集まる雲は、
定めなき人の世のさま眺め来りし
まなこには寂びて静けき色を帯ぶ、
かくてこの馳場もはせて賞も得られぬ。
吾等の生くる基なるひとごころあるがため、
その優しさ、喜び、恐れあるがため、
いとも卑しき一輪の花もこの身に与ふ
幾度か涙にあまる深き思ひを。

‘an eye / That hath kept watch o'er man's mortality’ (“Immortality Ode”, 198-99) とは、黙示録的想像力の支配下に置かれた視覚である。Wordsworthの自叙伝的長編詩 *The Prelude* (『序曲』) は、想像力が視覚を支配した瞬間を次のように記している。

In such strength
 Of usurpation, in such visitings
 Of awful promise, when the light of sense
 Goes out in flashes that have shown to us
 The invisible world, does greatness make abode,
 There harbours whether we be young or old.
 Our destiny, our nature, and our home,
 Is with infinitude, and only there —

(*Prel. Bk. 6: 532 - 39*)*

目に見えない世界を
 私たちに顕わす閃光を発して、感覚の光が
 消える時の、そのような王位篡奪の力にこそ、
 そのような畏怖すべき約束の訪れにこそ、
 私たちが青年であれ、老人であれ、
 偉大な存在は、そこに住まい、安らぐのだ。
 私たちの運命や、本性や、故郷は、
 無限とともに、ただそこにのみ存在する —**

フランス革命では、王政が倒されて共和政となり、支配者と被支配者の立場が逆転した。この引用の詩行では、想像力による視覚の支配は一種の精神の革命と見なされて ‘usurpation’ (「王位篡奪」) (*Prel. Bk. 6: 532*) と表わされている。Wordsworth が *Lyrical Ballads* に載せた “The Tables Turned” (「形勢逆転」) は、まさにこの立場の逆転を題名とする詩である。

Wordsworth は、幼年時代の ‘the visionary gleam’ (“Immortality Ode”, 56) の栄光を喪失しても、この想像力の支配下にある視覚によって ‘a sober colouring’ (“Immortality Ode”, 198) の世界を見ることができた。彼は、“Immortality Ode” で ‘a sober colouring’ によって表象している黙示録的な〈想像力の世界〉を、*The Prelude* では次のように ‘the visionary dreariness’ (「幻想的なわびしさ」) (*Prel. Bk. 11, 310*) によって象徴してお

り, 'the visionary dreariness' を色彩や言葉によって表現できないことを語っている。他方, Wordsworth は, "Peele Castle" (「ピエール城」) (*Poetical Works*, iv, 258-60) においてピエール城がかつて 'The light that never was, on sea or land' (「海にも陸地にも存在したことがなかった光」) (15) に包まれていたと書いている。〈栄光の世界〉もまた言葉や絵具で描写することはできないのである。

彼は, "Immortality Ode" 第 10 連の詩行で〈想像力の世界〉がどこで見出せるかを語っている。

We will grieve not, rather find
Strength in what remains behind;
In the primal sympathy
Which having been must ever be;
In the soothing thoughts that spring
Out of human suffering;
In the faith that looks through death,
In years that bring the philosophic mind.

(“Immortality Ode”, 180 - 87)

吾等嘆かず, むしろ残りし
もののなかに力を見出さん,
曾てありし故, 常にあるべき
生まれながらの感応のなかに,
人の苦しみより生まれ出づる
優しき慰めの思ひのなかに,
死の彼方を望む信仰のなかに,
悟りの心をもたらす年月のなかに。

The Prelude に用いられている 'usurpation' を重視すれば, "Immortality Ode" は一種の精神的革命によって樹立された〈想像力の世界〉の賛歌で

あるとさえ言えよう。

1. 豊田實博士の結論と想像力

豊田博士は, “Wordsworth and Bashô” (pp.11 - 12) において, Wordsworth と芭蕉の類似点と相違点を指摘したのちに, 次のように結論づけている。

After all has been said concerning the similarities and dissimilarities of the two poets, may I not say by way of conclusion that in the realm of gold the distinction of the East and the West is not of the first importance? What really counts is the depth of thought and the intensity of feeling, for as Wordsworth truly said,

“The gods approve

The depth, and not the tumult, of the soul.”¹

And it was given to these poets of the East and the West to fathom the depths of their great souls and bring to the shores of the human world untold riches of the deep serene.

これまで二人の詩人のすべての類似点と相違点を論じてきたが, 黄金の国においては東洋と西欧の区別は第一義的に重要な問題ではないと結論として述べてよいのではないか。なぜなら真に重要なのは思想の深さと感情の強烈さであって, Wordsworth がまさしく語っているように,

「神々が是認されるのは

魂の深さであり, 魂の騒乱ではない。」

からである。これらの東と西の詩人は, 自らの偉大な魂の深みを洞察して, 未だ語られたことがない静穏な大海の富をこの世の岸边にもたらすことが委ねられていた。

(原注 1 *Laodamia*, ll. 74, 75.)

本稿では、豊田博士が Wordsworth と芭蕉に共通する特徴であると帰結している ‘the dept of thought and the intensity of feeling’ についてとくに考察したい。なお、引用文の ‘the shores’ は、次の “Immortality Ode” 第9連の ‘the shore’ (167) によって説明されよう。

Hence in a season of calm weather
Though inland far we be,
Our Souls have sight of that immortal sea
Which brought us hither,
Can in a moment travel thither,
And see the Children sport upon the shore,
And hear the mighty waters rolling evermore.

(“Immortality Ode”, 162 - 68)

それ故に気象穏かなる季節には、
陸深くわれら居るとも、
吾等の魂はわれらを此の岸に渡したる
不滅の海原を望み、
瞬くひまに彼方に旅し、
子供等のその岸辺に戯るゝを見、
大浪のとはに逆巻く音を聞くことを得。

2. 靈魂の深み

“Immortality Ode” の最終連には、詩人として生きる Wordsworth の悟りが具体的に記されている。最後の2行、‘To me the meanest flower that blows can give / Thoughts that do often lie too deep for tears’ (“Immortality Ode”, 203 - 204) には、豊田博士の指摘する ‘the depth of thought and the intensity of feeling’ が見事に結実されている。

では、芭蕉の俳句においては、‘the depth of thought and the intensity of

feeling' はどのように表現されているのであろうか。

廿日餘の月かすかに見えて、山の根際いとくらきに、馬上に鞭
をたれて、數里いまだ鷄鳴ならず、杜牧が早行の残夢、小夜の
中山に至りて、忽驚く

馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり (甲子吟行)

(『芭蕉俳句集』, 62 頁, 参照)

馬上の芭蕉が馬のリズムに揺られて陶然として、まるで中国の古人、杜牧の世界を漂泊していたかのように描かれている。彼は茶を煮る煙を見て驚いて、〈現実の世界〉に戻った。しかし、彼の精神はまだ完全に覚醒していなかった。彼の属目した西行ゆかりの地、小夜の中山は、なるほど実景であったが、想像力が創り出した〈精神の世界〉と〈現実の世界〉の〈複合世界〉でもあったのである。この句においては、杜牧の詩にはない、「茶のけぶり」の心象が浮き彫りにされている。山の根ぎわの「いとくらき」暗黒部から天空へ立ち昇る「茶のけぶり」は、想像力の心象であり、想像力が「忽驚く」という心理の「闇」から生まれたことを表象している。

Wordsworth のルーシー詩篇の 1 篇, “Strange fits of passion have I known” (「私は奇妙な激情を覚えた」) (*Poetical Works*, ii, p.29) では、詩人が野道を馬上の人となって、恋人ルーシーとの逢瀬を一心に望んで、月を見守ったまま彼女の家に向かう姿が描かれている。月は、日常的な空よりもさらに高次な天空をめぐるかのように夢幻的な夜景を現出させている。

In one of those sweet dreams I slept,
Kind Nature's gentlest boon!

(17-18)

親切な自然のやさしい恵みの、
あの甘い恋の夢想に眠っていた！

馬が詩人を担って丘を登っていた時に、突然、月は恋人の家の背後に沈んだ。

When down behind the cottage roof,
At once, the bright moon dropped.

(23 - 24)

そのとき家の屋根の背後に
たちまち輝く月は沈んだ。

本詩は、詩人が眼前に突然現出した闇に強烈に印象づけられて、ルーシーが死んだのではないかという全く根拠のない不安に駆られたことを述べて、唐突に終了する。

What fond and wayward thoughts will slide
Into a Lover's head!
"O mercy!" to myself I cried,
"If Lucy should be dead!"

(25 - 28)

なんと愚かな、気紛れな思いが
恋する人の頭に浮かぶのか、
「あゝ、どうしよう」と、私は心の中で叫んだ、
「もしルーシーが死んでしまったら。」

この詩では、二つの対照的な〈幻想の世界〉が対応している。ひたすらルーシーを懐いて、明るい月を見つめていた詩人は、月が沈んだ瞬間に、甘い恋の夢想が破られただけではなかった。それまで月の光によって超自然的な〈幻想的な輝き〉を帯びていた外界が〈現実の世界〉の闇に急変したことによって、彼の意識には驚きによる心理的空洞（闇）が生じたのであった。その結果、彼は恋の高揚した歓喜の世界に対する反動として、ま

るで奈落の底に落ち込んだように、不安に駆られて、衝動的にルーシーの死を思ったと解釈したい。詩人の意識は、完全には〈現実の世界〉に立ち返らないままに、〈幻想の世界〉と〈現実の世界〉の〈複合世界〉の心理的闇に封印されたのであった。

なぜ闇の世界が突然現出したことによって不安が引き起こされたのかについては説明がなされていない。この暗示性に富む終結は、闇の世界が黙示録的な世界を象徴することを強調している。その瞬間に、幻想的な〈栄光の世界〉は、黙示録的な〈幻想的な侘びしさ〉の世界へ転換したと考えたい。しかし、Wordsworthにとって、これら二つの〈幻想の世界〉は表層的には相対しているが、深層的には宇宙の永劫の生命において連続しているのである。

この詩は〈天上の栄光〉の消滅が死を象徴することをドラマチックに描いた作品である。Wordsworthは、いわば、フランス革命勃発から恐怖政治が始まるまでは〈栄光の世界〉の住人に相応しかつたが、精神的な危機を経験した後に、心理的闇の意味を認識して黙示録的な〈想像力の世界〉の住人となった。彼の精神的遍歴はこの詩に反映されている。

一方、「馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり」は、いわばコラージュ形式で書かれており、このような〈夢幻の世界〉から〈幻想的な侘びしさ〉の世界へのドラマティックな心理的転換は表現されていない。山の根ぎわの闇の存在や「忽驚く」という心理の闇は前文があつてはじめて知ることができる。芭蕉の発句においては、闇は七五調、季語、17字の字数、時間が同時的に捉えられてコラージュ形式で構成されていることや、また闇についての思想のために普段表現されていないのである。

3. 想像力と闇

芭蕉と Wordsworth の詩の世界は、心理的の闇が現出したのちに、想像力による〈現実の世界〉と〈精神の世界〉の〈複合世界〉が形成されるプロセスにおいては、きわめて類似している。

いなづまや闇の方行五位の声（続猿蓑）

芭蕉は元禄7年（1694）の十月十二日に死去したが、この句をその年の夏に作っている。この句の初案は、「宵やミくらし五位の声」であった。Robert Aitken は、キリスト教とアジアの宗教における闇の相違について述べてからこの句の「闇」を説明している。

In Christianity, darkness denotes sin and error, but for the poet and the student of religion in Asia, darkness is an organic metaphor of the undifferentiated absolute, while light is the experience of the immediate, phenomenal world. Absorbed in the darkness, Basho is absorbed in the universe, timeless, without bounds. Suddenly, out of the blackest depths comes that extraordinary blaze of light, and the whole world of particulars is etched at once, chillingly, in his mind. Then darkness returns, and from that absolute vacancy again there is vivid eruption, this time an eerie scream.

(Aitken, pp.75 - 76)

キリスト教では、闇は罪や誤りを意味しているが、アジアの宗教詩人や宗教家にとっては闇は個別化されていない絶対についての有機的な隠喩であり、他方、光は直覚による現象的世界の経験である。闇に吸収されて、芭蕉は時間が無い渺茫たる宇宙に吸収されている。突然、最も暗い深みから極めて強烈な閃光が走ると、たちまち個別的世界のすべてが彼の精神に冷たく刻印される。それから闇が戻る、すると再び闇の絶対的な空虚から鮮明な爆発が、しかも今度は不気味な叫び声起きるのである。

ここで Aitken が論じている、稲妻とゴイサギの鳴き声の生起の間に宵の闇を挟む、動から静へ、静から動へという二段階の時間的過程と、Wordsworth が *The Prelude* の第8巻で、次のように洞窟の比喩を用いて表

現している想像力の活動過程には類似性がみられる。

As when a traveller has from open day
 With torches passed into some vault of earth,
 The grotto of Antiparos or the den
 Of Yordas among Craven's Mountain tracts;
 He looks and sees the craven spread and grow
 Widening itself on all sides, sees, or thinks
 He sees, ere long the roof above his head,
 Which instantly unsettles and recedes –
 Substance and shadow, light and darkness, all
 Commingled, making up a canopy
 Of shapes and forms and tendencies to shape
 That shift and vanish, change and interchange
 Like spectres – ferment quiet and sublime
 Which after a short space works less and less,
 Till, every effort, every motion gone,
 The scene before him lies in perfect view
 Exposed, and lifeless as a written book!
 But let him pause awhile and look again
 And a new quickening shall succeed, at first
 Beginning timidly, then creeping fast
 Through all which he beholds.

(*Prel.*, Bk. 8: 711-31)

一人の旅人が、明るい外の世界から
 松明を灯して、アンティパロスの洞窟か、
 クレイヴン山岳地帯のヨーダスの洞窟か、
 あるいはどこかのアーチ型の屋根をした洞窟に入った時に、
 洞窟が拡張し、拡大しながら、四方八方に

広がるのに視線を向けて、凝視する。
たちまち揺らぎ退いていく頭上の天井が、
実体と影が、光と闇が、すべてが合体して、
形態と形状の天蓋を——幽霊のように
移動しては消え、変化しては交互する
成形の傾向をもつ天蓋を——作り上げるのを見る、
あるいは見るように思う——
その静穏で崇高な動乱は、まもなく次第に弱まり、
やがて努力や動きは、すべて消滅して、
眼前のものは、彼の視線に完全にさらされて、
書かれた書物のように生命を失い存在する。
しかし彼をしばらく休息させてから再び見させよう。
新しい胎動が引き続いて起きる。最初は
運動がおずおずと始まるが、彼が見ているすべての物に
急速に広がっていく。

旅人が日中、洞窟内部の暗い世界に入った時には、現実の世界の断層に入ったかのように、彼の視覚は想像力によって支配される。この闇の中の知覚現象は、精神の世界における 'usurpation' に例えることができる。

Lyrical Ballads の "The Preface" (「序文」) (1800年) には、詩作の原理が次のように記されている。

I have said that Poetry is the spontaneous overflow of powerful feelings: it takes its origin from emotion recollected in tranquillity: the emotion is contemplated till by a species of reaction the tranquillity gradually disappears, and an emotion, similar to that which was before the subject of contemplation, is gradually produced, and does itself actually exist in the mind.

(*Prose Works*, i, p.148)

詩は力強い感情がおのずから流出したものであると述べた。それは静謐な時に回想された情緒に起源する。その情緒は瞑想されて、やがて一種の反動によって、静謐は次第に消えて、先ほど瞑想の対象となった情緒に類似する情緒が次第に作られて、心に実際に存在するようになる。

この詩作の原理を、「原体験の興奮が醒めて、静謐な〈現実の世界〉で〈原体験の情緒〉が回想されて瞑想された時に、やがて一種の反動によって静謐は次第に消えていき、〈原体験の情緒〉と静謐な〈現実の世界〉の〈複合世界〉が心の中に実際に存在するようになる」と書き直してみたい。

洞窟の暗い内壁は活動を始め、その後いったん活動を停止して静謐が訪れると、やがて活動を再開して、様々な心象を映し出していく。内壁の動から静、静から動への二段の過程は、Wordsworthの詩作の原理にも見られる。この過程はColeridgeの第2想像力を想起させるものである。

次の詩行は精神には相異なる不協和音的な要素を音楽のリズムのように調和する神秘的な作用があることを述べており、Wordsworthの想像力を理解する上で重要なものである。

The mind of man is framed even like the breath
 And harmony of music; there is a dark
 Invisible workmanship that reconciles
 Discordant elements, and makes them move
 In one society.

(*Prel. Bk. 1: 351 - 55*)

人間の精神は、まさに音楽の息吹や
 旋律のように作られている。
 不協和音の要素を調和して、
 一つの共同体として運動させる、暗く目に見えない
 手ぎわが存在している。

John G. Rudy は、「いなづまや闇の方行五位の声」の「闇」を援用して、
'a dark / Invisible workmanship' を次のように説明している。

The darkness Bashō remarks is the undifferentiated wholeness of his own mind, which exists in both perfect continuity and perfect identity with nature. Like Wordsworth's "dark workmanship," it is not a separately existing energy so much as a positive force-field working not against light, as we might expect, but as a capacious enabling arena for all form and energy.

(Rudy, p.45)

芭蕉が語っている闇は、彼自身の精神の個別化されていない総体であって、その総体は自然と完全に連続し、また完全に同一なものである。ワーズワスの「暗く目に見えない手ぎわ」のように、闇は光と相対して作用するという私たちの予期に背くような正の力の場として、個別的に存在するエネルギーではなく、むしろすべての形象やエネルギーを生み出す力の広大な場である。

Wordsworth は、少年時代に深刻に悩んだ体験を次の *The Prelude* 第 1 巻のボートのエピソードで語っている。

and after I had seen

That spectacle, for many days my brain
Worked with a dim and undetermined sense
Of unknown modes of being. In my thoughts
There was a darkness — call it solitude,
Or blank desertion. No familiar shapes
Of hourly objects, images of trees,
Of sea or sky, no colours of green fields,
But huge and mighty forms that do not live

Like living men moved slowly through the mind
 By day, and were the trouble of my dreams.

(*Prel. Bk. i. 417-27*)

その光景を見た後、
 何日間も私の頭脳には存在の
 未知の形態のほの暗くおぼろな意識が
 こびりついていて。私の思考には
 暗黒があった——それは孤独とか、
 全くの遺棄とかと表されるものであった。
 日ごろ見馴れた事物の姿も、木の心象も、
 海や陸の心象も、緑の野の色彩もすべて消えて、
 ただ、巨大で力強い形態が、生命をもたないのに、
 昼間には心の中を生きている人のようにゆっくり歩き、
 夜には夢に出てきて私を悩ませた。

この一節は、少年の彼が 'solitude' または 'blank desertion' と表現されている 'a darkness' が思考を占めたことによって非常に悩んだことを語っている。彼の精神内部の 'a darkness' は、いわば湖畔の闇と精神の闇が複合された闇であったのだ。

Rudy は引用の一節で、「いなづまや」の闇が外在する 'a capacious enabling arena for all form and energy' であることを述べて、'a dark / Invisible workmanship' の説明を試みている。しかし、闇と精神とは独自の存在であるが、Wordsworth の世界においては想像力によって複合されて、'the visionary dreariness' で象徴される世界を形成するのである。闇についての思想は芭蕉と Wordsworth では異なっていたと考えたい。

4. 隠遁の生活

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉（武蔵曲）

芭蕉は、延宝8年（1680）37歳の時に宗匠生活を捨てて深川の草庵に隠棲した。この句はその翌年の作である。この句には、彼が草庵で杜甫や蘇東坡の清貧な生き方を実践した反俗精神が表れている。この句から、芭蕉が野分の夜に、漢詩人たちの詩句を思い起こしながら、雨風が芭蕉の木の葉を打つ音や雨漏りがいくつかの盥で立てる音を自然が奏でる曲として聞いて、俳人として閑居を楽しむ姿が彷彿されてくる。この句では、とくに嵐のもたらず音を自然のリズムとして捉えた彼の想像力に注目したいのである。

Wordsworth は、*The Prelude* 第11巻の次の詩行で、幼少期の二つの重要なエピソードの記憶を 'spots of time'（「時の点」）と呼んで、それらの記憶が彼の精神的苦悩を回復する上で大きな影響を及ぼしたことを語っている。

There are in our existence spots of time
Which with distinct pre-eminence retain
A vivifying virtue.

(*Prel.* Bk. 11: 257 - 59)

私たちの存在には時の点があり、
比類のない傑出さで生気を与える効力を
保持している。

Wordsworth は、典型的な黙示録的な夜景をその第2のエピソードに記している。彼は、ホークスヘッド校の生徒の頃、クリスマス休暇で帰省する夜に嵐の中を荒涼とした岩山に一人登って、斥候のように父親から遣わされて来る子馬の到着を待ったことがあった。彼の父はクリスマス休暇中

に他界した。帰省する夜に彼が聞いた石塀を打つミゾレまじりの強風の侘びしい音は、父の死後に同じ場所を訪れた時には、‘music’（「調べ」）（*Prel. Bk. 11: 378*）として聞いたのであった。

18世紀末から19世紀にかけてイギリスではピクチャレスクの趣味が流行した。ピクチャレスクの信奉者たちは、湖水地方を訪れて、自分たちがつくった基準に適している景観美を探求して、また嵐にもピクチャレスクの美を見出していた。しかし、Wordsworthは、嵐に彼らが無視した自然の靈性を知覚したのであった。彼は、この引用の詩行に続いて、その後嵐の夜中に屋根を打つ雨の音や日中森の木立を揺るがす強風の音によって、魂の活動が喚起されたことを書いている。

5. 残りしもの

早苗とる手もとや昔しのお摺（おくのほそ道）

芭蕉は『おくのほそ道』に、元禄2年（1689）に福島のしのおもち摺を訪れたことを記している。芭蕉は、もち摺石の表面が下向きとなって土の中に半ば埋もれてあるのを見て、残念に思い、そのわけを村の子供から聞いた時の心境を「さもあるべき事にや」と表現している。この肯定と否定が相和している言葉は、昔から由緒ある土地を初めて訪れた旅人が、その土地にまつわる事柄をよく理解できなかつたが、何か真実に感じられる心境をよく表している。これはまさに風雅の心であった。また、芭蕉はかねてからしのお摺を染める作業を見たいと願っていたが、しのお摺の風習がすでになくなっていたのを知って大いに落胆したのに相違ない。しかし、彼は失望してしのおの里を立ち去ったのではなかつた。

ところで、Wordsworthは、喪失したものについてただ徒に嘆いたのでなく、過去の栄光の残照を‘what remains behind’（“Immortality Ode”, 181）に見い出した詩人であった。折から乙女たちは田植えをしていた。船頭や馬子のように、街道筋を生活の場として自然界を漂泊しながら人世

の新旧の交代劇を見てきた芭蕉にとって、半ば土の中に埋もれた〈もち摺石〉や田植えをしている乙女たちは Wordsworth の ‘what remains behind’ であった。彼は乙女たちが田植えをしている手ぶりに昔のしのお摺りの手ぶりを偲んだのである。

6. 幽玄な境地

Wordsworth は、自叙伝的な短詩 “There Was a Boy” (「一人の少年がいた」) (*Poetical Works*, ii, p.206) において、少年が湖畔に響いたフクロウの陽気な鳴声とそのこだまが聞こえなくなったのちに、再びフクロウが鳴き始めるのを耳を澄ませて待ち構えていたが、聴覚の緊張がゆるんだ時に、‘the voice / Of mountain torrents’ (「山あいの急流の声」) (20-21) を聞いたこと、また湖面に荘重で静謐なイメージを見たことを語っている。

日常の〈感覚の世界〉では、フクロウの鳴声やそのこだまは静謐と共時的に存在することはできない。しかし、‘a gentle shock of mild surprise’ (「驚きの衝撃」) (19) を境にして、静謐に ‘the voice / Of mountain torrents’ が入り込んできて、〈現実の世界〉と〈精神の世界〉の〈複合世界〉が生じたのであった。‘a pause / Of silence’ (「静かな休止」) (16-17) には、フクロウの鳴声やこだまの活動力が内蔵されているのである。

また、ボートから澄んだ水底を見る人が、‘cannot part / The shadow from the substance – rocks and sky, / Mountains and clouds’ (「岩と空、山と雲 — 実体から映像を分離することができない」) (*Prel. Bk. 4: 254-56*) のは、その心象風景が想像力によって変容された〈複合世界〉であるからである。

閑さや岩にしみ入蟬の声 (おくのほそ道)

Wordsworth の詩作の原理と照らし合わせて、芭蕉が静穏な時に山寺における原体験を回想してこの句を創作したと仮定したい。この句は、「山寺や石にしみつく蟬の聲」を初案として、「さびしさや岩にしみ込蟬のこゑ」

や「淋しさの岩にしみ込せみの聲」に改案されている。この句は、Wordsworth の 'the visionary dreariness' をとくに感じさせる。「閑さや岩にしみ入蟬の声」は、梁の王籍の「蟬噪林逾静，鳥鳴山更幽」を下敷きに行っているとされている。王籍は同じような詩境をいっそう凝縮して表現している。

〈現実の世界〉では、「岩にしみ入」と誇張されている蟬の声と「閑さ」とは全く相反しているが、この句の〈複合世界〉では蟬の声と岩山の「閑さ」は一体化されている。この句では時間が同時的に捉えられており、岩山はいわば蟬の声を、蟬の生命力を内部に封印しているかのように幽玄である。なお、蟬は、“There Was a Boy” のフクロウと同じ機能を果たしていると言えるのである。

古池や蛙飛びこむ水のをと（春の日）

この芭蕉の代表作とされる句は芭蕉庵で作られたと言われる。この句は貞享3年（1686）の春に発表された。墨絵は、勿論、蛙が池に飛び込んで立てた水の音を描くことはできないが、この句は時間を同時的に捉えており、そのために古池の「水のをと」は余韻となって精神に残される。一方、現実の世界においては、古池は水面に波紋を残しているが、飛び込んだ蛙の生命力を内部に秘めている。この句には「閑さ」という言葉は使われていない。しかし、「水のをと」によって、むしろ「閑さ」が喚起されて、この句独自の幽玄な世界が産み出されているのである。この句は、〈精神の世界〉と〈現実の世界〉の〈複合世界〉としての古池がもつ神秘性を見事にうたっている。

芭蕉は『笈の小文』に、「風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし」という有名な風雅観を記している。また、芭蕉は「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、其貫道する物は一なり」と述べている。芭蕉は、水に飛び込む習性をもつ蛙や喧

しく鳴く蟬を、彼の風雅観における「花」や「月」に相当する存在として句を作ったのである。

芭蕉にとって、風雅は和歌や連歌や墨絵や茶道において表現できるものであった。芭蕉の風雅観は彼の俳人としての「悟り」であり、また、Wordsworth の想像力説も詩人としての「悟り」であった。Wordsworth は、“Immortality Ode” の第 10 連に自己の「悟り」をいくつかの観点から述べている。

“Immortality Ode” 第 9 連の ‘a season of calm wheather’ (162) の静謐は音が欠如しているのではなくて、‘active negation’ (Bradley, p.49, note 1) のような、音を征服する圧倒的な力を持つ絶対者の存在を暗示している。芭蕉の「閑さ」は、そのような絶対者によってではなく、蟬や蛙によって生み出されたのである。これらの芭蕉の句は、「高く心を悟りて俗に帰るべし」(『赤冊子』) の教えをよく伝えている。それでも Wordsworth と芭蕉の静寂には、ともに活動力が内蔵されており、永遠の世界へ誘う空間的な広がりや深みが内在している。

7. 漂泊の詩人

Wordsworth も芭蕉も驚異的なほど各地を旅した詩人であった。Wordsworth は、大陸徒歩旅行を終えてケンブリッジ大学へ戻った時に、生活の場を大学の建物よりも ‘vagrant tent’ (「流浪者のテント」) (Prel. Bk. 7: 60) を望んだように、彼の生活は旅と切り離せなかった。Wordsworth は 80 歳の生涯において 28 万キロ以上歩いたと言われている。

芭蕉は『おくのほそ道』の冒頭で、「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」と時間を旅人に例えている。彼は、漂泊の思いに駆られると旅に出かけた、一所不在の詩人であった。

山路来て何やらゆかしすみれ草 (甲子吟行)

上五「山路来て」という言葉は、初案では次のように「何とはなしに」と表されていた。

白鳥山

何とはなしになにやら床し葶草（皴篔物語）

どちらの句にも行脚修行の俳人であった芭蕉の本領が発揮されている。この句は芭蕉が山路に咲くすみれ草に説明のできない床しさを感じ取って、精神的に癒されたことを暗示している。同時に、すみれ草は〈現実の世界〉の存在から〈現実の世界〉と〈精神の世界〉との〈複合世界〉の存在へと高められている。「高く心を悟りて俗に帰るべし」は、「高く心を悟りて」という〈精神の世界〉と、「俗に帰るべし」という〈現実の世界〉の〈複合世界〉を創造する想像力の重要性を説いた言葉である。

Wordsworth は田舎の少女ルーシーを苔むす石の傍らに咲くすみれ草に例えていた。また彼は、“Immortality Ode” の最終連では、‘the meanest flower’ (203) という野草によって詩人としての悟りの心境を表現している。このように、Wordsworth の精神もまた、芭蕉の「高く心を悟りて俗に帰るべし」という精神に通じるところがあった。

8. 複合世界

芭蕉の俳諧の一つの発句は、いわば Wordsworth の一つの ‘spot of time’ であり、連句は句が共時的に結ばれた一つの〈時の線〉の〈複合世界〉と言えるのではないか。

芭蕉は貞享4年（1687）12月下旬に伊賀上野に帰郷して、翌年、2月18日に実家で営まれた亡父の33回忌追善法要に列席した。彼は同年2月下旬に三重県阿山郡大山田村の新大仏寺を訪れたことを二つの句を添えて『笈の小文』に記している。

伊賀の國阿波の庄といふ所に、俊乗上人の旧跡有。護峰山新大仏寺とかや云、名ばかりは千歳の形見となりて、伽藍は破れて礎を残し、坊舎は絶て田畑と名の替り、丈六の尊像は苔の緑に埋て、御ぐしのみ現前とおがまれさせ給ふに、聖人の御影はいまだ全おはしまし侍るぞ、其代の名残うたがふ所なく、泪こぼるゝ計也。石の連臺・獅子の座などは、蓬・葎の上に堆ク、双林の枯たる跡も、まのあたりにこそ覚えられけれ。

丈六にかげろふ高し石の上

さまさまの事おもひ出す櫻哉

(『芭蕉紀行文集』, 76-77 頁, 参照)

最初の「丈六にかげろふ高し石の上」の句は、破損が著しい丈六の尊像を見て、芭蕉が創作された当初の尊像を想像力によって再現したことをうたっている。「さまさまの事おもひ出す櫻哉」は、芭蕉が同年の3月上旬に、故主良忠の嗣子良長（俳号探丸子）によって玄蕃町の下屋敷「八景亭」に招かれた時によまれた句である。その時探丸子は23歳であった。1666年に良忠が25歳で夭逝したことによって、23歳の芭蕉は生涯を決定づけられたが、その日から22年の歳月が流れていた。

Wordsworthにとって、フランス革命の揺籃期や彼の幼児期は、天上の栄光が顕在化していた時期として回想された。彼は、“Immortality Ode”に3行のモットーの詩行を付けている。その最後の2行 ‘And I could wish my days to be / Bound each to each by natural piety’（「そして私の日々が自然な孝敬の思いをもって、一つ一つ、つながっていてほしいのだ！」）（「大空に虹を見る時」『佐藤清全集Ⅲ（散文・訳詩）』, 292頁）に用いられている ‘piety’ には、（親・目上の人などに対する）敬愛、孝行心、忠誠心という意味が内包されている。芭蕉は、生涯、旧主への敬愛と忠誠心を失うことはなかった。本稿は、芭蕉が良忠の生前に仕えていた二十歳頃の幸福な日々を〈幻想的な輝き〉に包まれている〈現実の世界〉の典型として回想していたことを仮定している。芭蕉にとって、1688年に探丸子と連

句をよんだ日は、蟬吟が没した1666年4月25日と繋がる日となった。芭蕉の俳句の世界は、Wordsworthの詩の世界のように、原理的には〈幻想の世界〉と〈現実の世界〉の〈複合世界〉として、日々が通時的にも共時的にも結ばれている世界であった。

Ⅲ. 結語

芭蕉とWordsworthは、^{はたち}二十歳の頃に、後に〈幻想的な輝き〉に包まれていたと回想された時期に、芭蕉の場合には良忠に、またWordsworthの場合にはフランス革命一周年記念日の前夜祭で見たカレー市民に象徴される人たちと交流していた。芭蕉とWordsworthは、ともにこれらの人々から人間精神の偉大さの信念を得ていた。本稿は、彼らが〈幻想的な輝き〉を喪失した世界に生きても、それらの人々のイメージを想像力の指針としていたことを前提として論じてきた。それでも彼らは決して後ろ向きに生きたのではなかった。芭蕉もWordsworthもともに前向きの詩人であり、これまで考察してきたように想像力によって俳諧や詩の革新を図って漂泊したのであった。

旅に病で夢は枯野をかけ廻る（笈日記）

霧が山や野を旅をする人を包み込んで、旅人の足を止めることがある。Wordsworthは*The Prelude*第6巻で想像力の働きを‘vapour’（「霧」）（*Prel. Bk. 6: 527*）の圧倒的な力に例えている。芭蕉は、元禄7年（1694）の秋に旅先の大阪で病床に伏した。彼は、いわば霧の渦に包まれて身動きができない旅人の状況にあった。下五の「かけ廻る」という言葉使いから幼児の動作が暗示される。この句には、肉体が衰えるとかえって想像力が活発になって、まるで落ち葉が10月の秋風に吹かれて戯れているように、想像力が駆け回る意識が表されていないだろうか。

芭蕉は、「造化にしたがひ、造化にかへれ」(『笈の小文』)、また臨終の言葉とされる「高く心を悟りて俗に帰るべし」等で表される精神をもって、死に至るまで漂泊の旅を続けて蕉風俳諧の普及に努めたのであり、彼の夢はまさにこの使命の成就であった。

Wordsworth は、*The Prelude* を終えるにあたって、Coleridge に次のように呼びかけている。

Prophets of nature, we to them will speak

A lasting inspiration, sanctified

By reason and by truth.

(*Prel.* Bk. 13. 442 - 44)

(私たちは、自然の預言者として、理性と
真理とにより正当化された永遠の靈感を、
彼らに説いていこう。)

Wordsworth は Coleridge とともに、‘Prophets of nature’ として、詩によって人々の心に潜んでいる想像力を喚起して、理想的な社会を建設しようという使命感を抱いて、とくにフランス革命の成り行きに失望したイギリスの青年たちの精神を救済することを願っていた。また、Wordsworth の想像力説は自然愛と結びついており、今日の自然保護の精神に繋がっている。

芭蕉と Wordsworth は、異なる時代・文化に生きた詩人であり、様々な相違点が見られる。しかし、両詩人の作品について考察を進めていくと、豊田博士の指摘のように、彼らは何よりも ‘the depth of thought and the intensity of feeling’ において類似していることが浮き彫りにされてくるのである。

【注】

**The Prelude* からの引用は 1805 年のテキストによる。引用の数字は巻と行の意味である。

**日本語訳は特記しない場合は筆者による。

【参考文献】

- Aitken, Robert. *A Zen Wave: Bashō's Haiku and Zen*. Washington, D.C.: Shoemaker, 1978.
- Bradley, A.C. *Oxford Lectures on Poetry*. London: Macmillan, 1965.
- 萩原恭男校注『芭蕉おくのほそ道』岩波書店, 東京, 1979年。
- 中村俊定校注『芭蕉紀行文集』岩波書店, 東京, 1971年。
- . 『芭蕉俳句集』岩波書店, 東京, 1970年。
- Rudy, John G. *Wordsworth and the Zen Mind: The Poetry of Self-Emptying*. Albany: State University of New York Press, 1996.
- 佐藤清『佐藤清全集Ⅲ (散文・訳詩)』詩声社, 東京, 1964年。
- 豊田實『ワーズワス詩抄』北星堂, 東京, 1969年。
- . “Wordsworth and Bashō”, 日本英文学会編『英語英文学論文集』第1輯, 研究社, 東京, 1931年。
- Wordsworth, William. *The Poetical Works of William Wordsworth*. Ed. E. de Selincourt and Helen Darbishire. 2nd ed. 5 vols. Oxford: Clarendon Press, 1940-49.
- . *The Prelude: The Four Texts (1798, 1799, 1805, 1850)*. Ed. Jonathan Wordsworth. Harmondsworth: Penguin Books, 1995.
- . *The Prose Works of William Wordsworth*. Ed. W. j. B. Owen and Jane Worthington Smyser. 3 vols. Oxford: Clarendon Press, 1974.

本稿は、東北学院大学において開催された日本比較文学会第67回全国大会(2005年6月19日)の研究発表に加筆・修正したものである。